

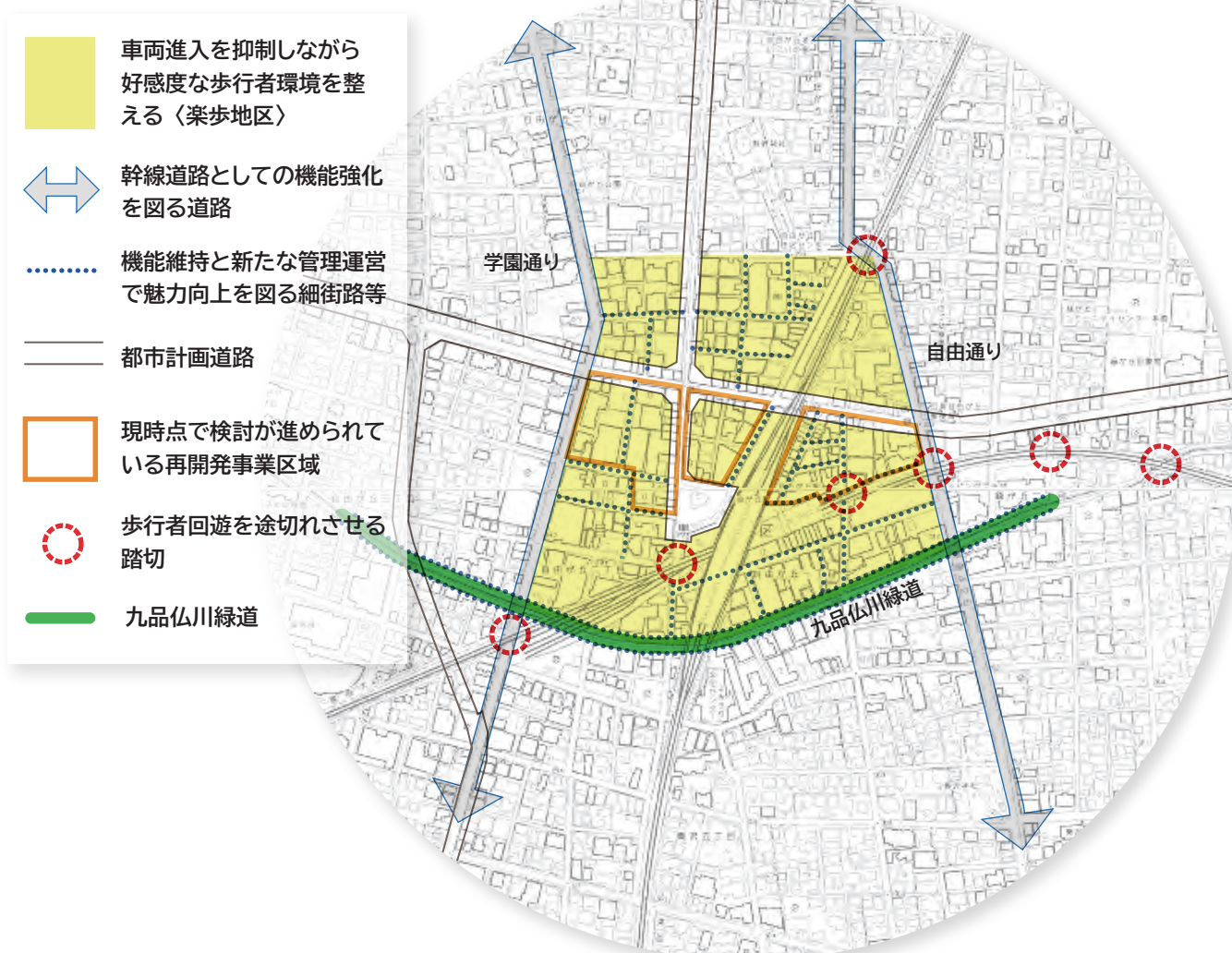


駅前と周辺を安全と楽しさでつなぐ『楽歩、環境』 をつくりだす……………誰もが安全・快適に回遊できる歩行者空間の創出

まちの利用者として迎え入れる誰もが心地良さを感じ、また訪れたいくなる美しさ・楽しさ・歩きやすさを備えた『楽歩』と称する安全で快適な環境形成を目指していきます。駅周辺における通過車両や搬出入車両の進入抑制と、歩行者空間の拡充により、細街路等によって自由が丘が醸成してきた回遊の魅力を拡充していきます。

方針① 歩行者を主役としていく〈楽歩地区〉の範囲を定める

自由が丘駅周辺において商業機能が集積する区域を対象として、**細街路への車両進入の抑制と歩行者空間の拡充を重点・集中的に進める〈楽歩地区〉**を定め、道路基盤整備、細街路での交通規制の強化、建物更新のルール、駐車場地域ルール、自転車の押しチャリルールなどを組み合わせることにより、歩行者を主役とした自由が丘ならではの回遊環境の形成を目指していきます。



方針② 踏切による回遊の支障を解消する

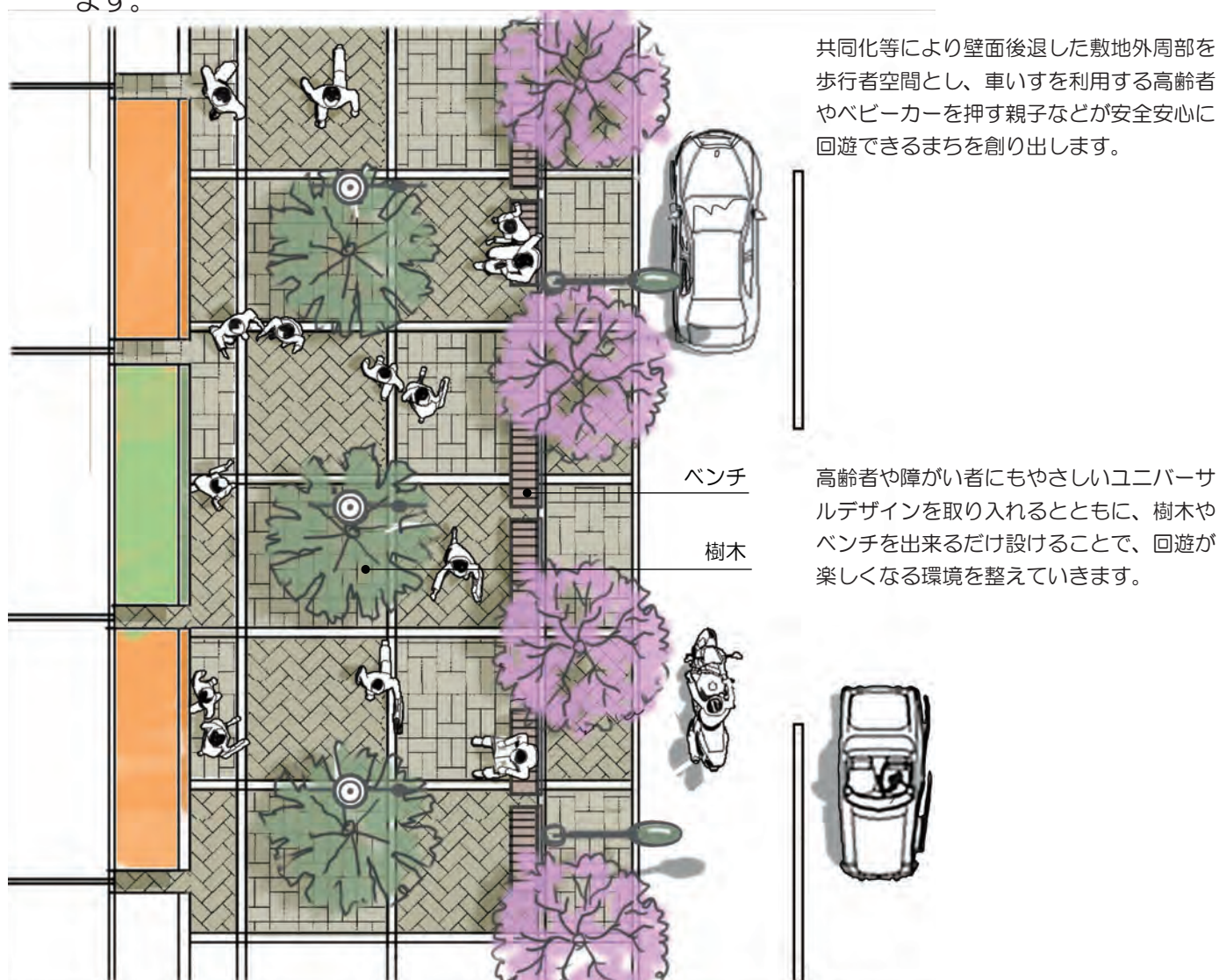
〈楽歩地区〉内における歩行者の円滑な流動をつくり出すために、道路と鉄道の立体化を図り、複数箇所（位置は26頁参照）の踏切問題の解決を目指していきます。

方針③ 建物の更新を通して〈楽歩地区〉内に出来るだけ多くの歩行者空間（樹木＋日本一多い座れる場）を創り出す

〈楽歩地区〉をあらゆる人に対してやさしく親密な場としていくために、建物の更新等によって出来るだけ幅が広く、フラットに連続する歩行者空間の創出を目指していきます。

この歩行者空間においては、夏場に木陰をもたらし、ビル風を防ぐ樹木を、沿道の商業活動に支障をきたさない形での整備を目指していきます。

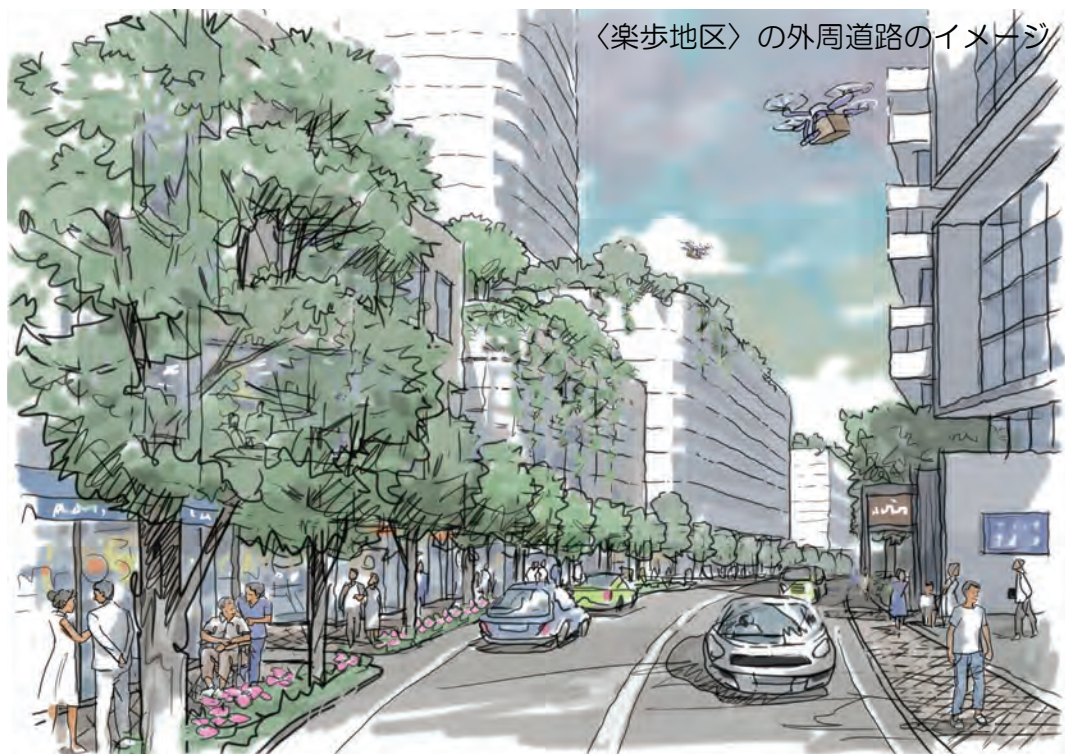
また、九品仏川緑道をはじめとして各箇所既に設置されるベンチに加え、〈楽歩地区〉内に出来るだけ多くの座れる場を整備し「日本一座れる場所が多いまち」を目指していきます。



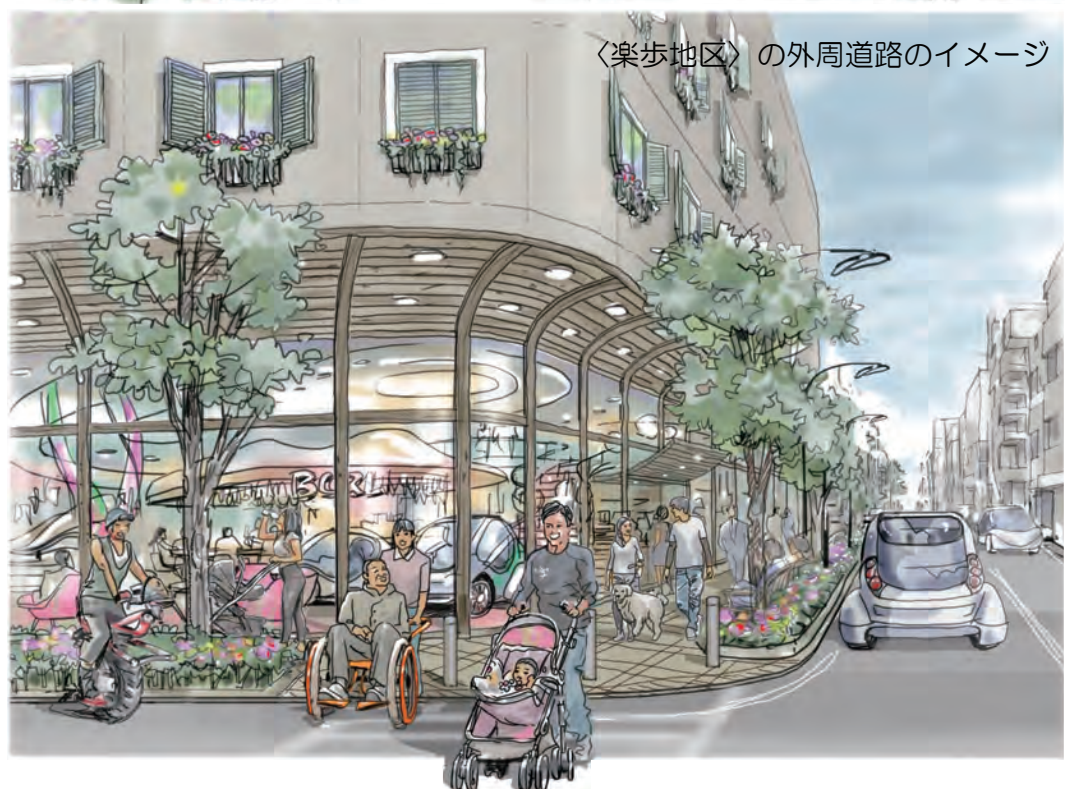
〈楽歩地区〉内における歩行者の安全な通行を確保していくために、車両流動を支える学園通りや自由通りの沿道は、共同化や地区計画等を活用することにより敷地内での十分な歩行者空間を確保し、車両との分離を目指していきます。

特に学園通りは、自由が丘の中でも比較的中規模の敷地が揃う沿道であることから、良質な商業店舗が立ち並ぶ東京を代表するストリートとしての整備を目指していきます。

〈楽歩地区〉の外周道路については、グリーン×デジタルの実装により、今後予想される自動運転車両をはじめとする次世代交通技術や歩行者支援技術の進展にも対応する道路としていきます。

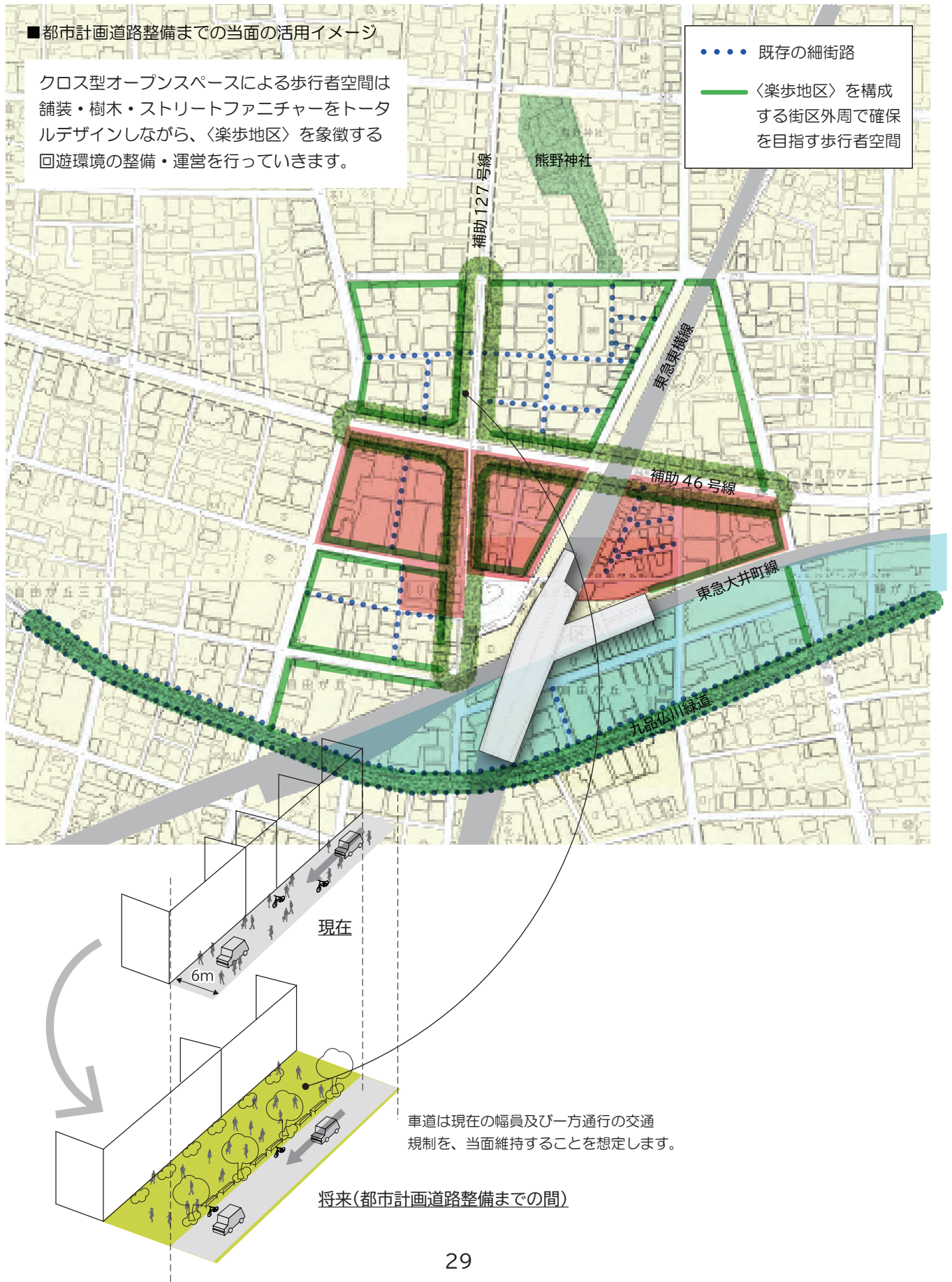


〈楽歩地区〉の外周道路のイメージ



〈楽歩地区〉の外周道路のイメージ

〈楽歩地区〉の中心部は、都市計画道路補助 127 号線と同補助 46 号線が交差することから、これに面する敷地での共同化や地区計画等を活用することにより、九品仏川緑道に並び自由が丘の名所となる**クロス型オープンスペースによる歩行者空間の整備**を目指していきます。

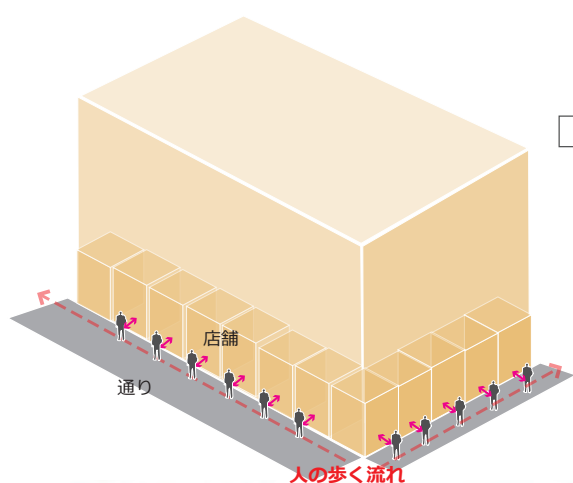


方針④ 建物の更新に伴って〈楽歩地区〉内の「細街路」を平面・立体に増やし繋いでいく

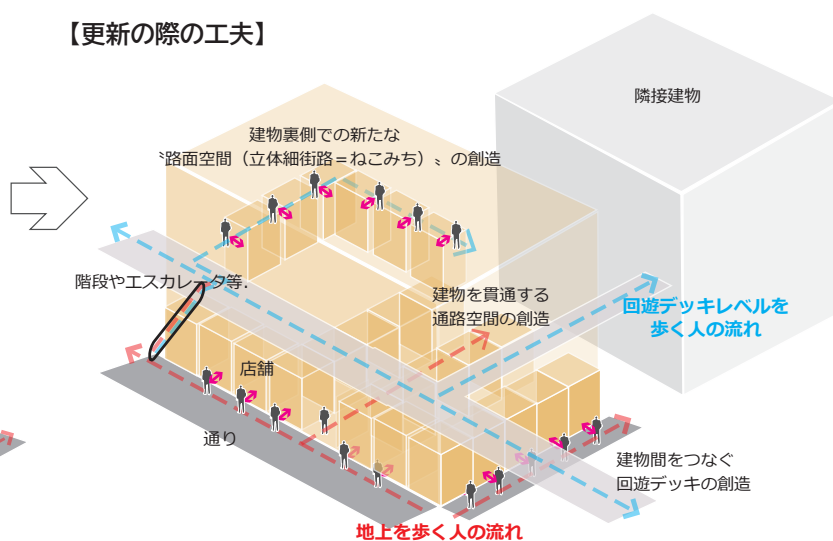
自由が丘の回遊環境を支える重要な基盤である細街路は、例えば街区再編等の際に無くしてしまうのではなく、次代に向けて発展的に拡充していくことで〈楽歩地区〉の魅力向上を目指していきます。

具体的には、一定規模のビルでは、それぞれの建物をつなぐ回遊デッキ、建物裏側からのアクセスを可能とする「ねこみち」、建物を通する通路空間を整備するなど、立体的にまちの回遊性を向上させ、まちの隅々まで人が歩き回れるようなまちを目指していきます。

【現状】



【更新の際の工夫】



個別の建替えや共同化を通して、建物同士をつなぐことにより、従来の街路に面する空間に加え、街区の内側や建物の隙間にも商業活動の場を設けていくことで、来街者による回遊の楽しさや滞留する面白さを増幅させていきます。

方針⑤ 新たに生み出す歩行者空間や広場において 歩行者がふと足を止めるような取組を日常化していく

女神まつりやマリクレールフェスティバルなど自由が丘を代表する季節ごとのイベントについては継続・発展させていく一方で、〈楽歩地区〉内において拡充する歩行者空間や広場等を活用して、日常的にそこかしこで歩行者がふと足を止めて、時間を楽しむまちを目指していきます。

角を曲がると出くわすアートや音楽など各場所・各道路に関わる組織や団体による普段づかいの創意工夫によって、子供から高齢者、買い物客からビジネスマンといった多様多彩なまちの利用者が生き生きとまちを楽しむシーンづくりを目指していきます。

アートギャラリー



ファッションショー



スポーツイベント



ベンチでの飲食・読書



まちなかピクニック



カリヨン／オープンカフェ



大道芸（パフォーマンス）



屋外フードコート



まちなかコンサート



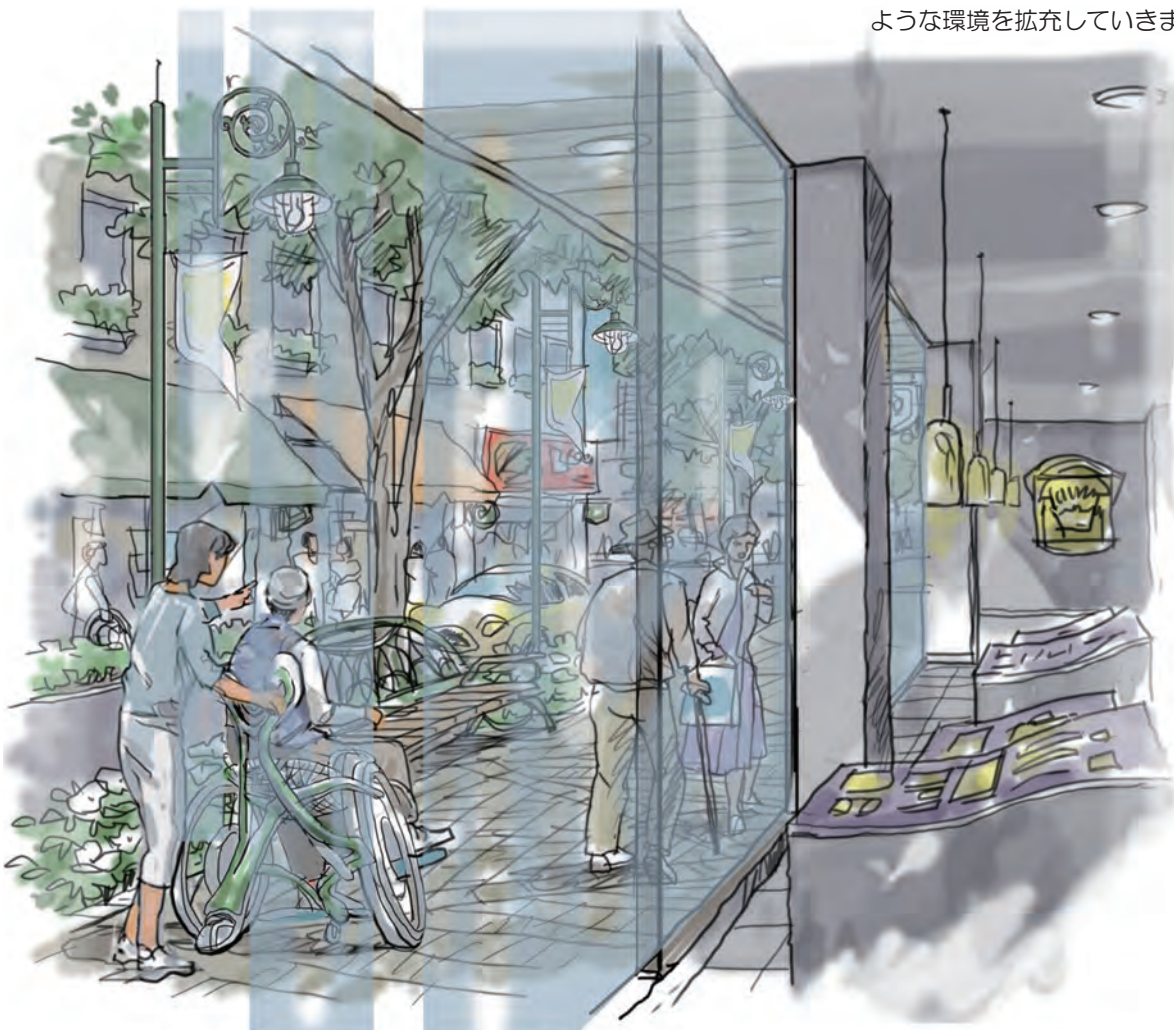
方針⑥ 〈楽歩地区〉においては可能な限り街区間の地下空間での接続連携を図りつつ車両交通処理を行っていく

〈楽歩地区〉においては、一般車両や搬出入車両の出入りを抑制し、歩行者の安全な通行を確保していきます。一定規模の建物については街区間の地下部で接続・連携する計画を目指していきます。

方針⑦ 〈楽歩地区〉内の路面店舗は内部が伺える透過性や街路が交差するコーナーなど賑わいの設えを大事につくる

まち歩きの楽しさの1つは沿道に立ち並ぶ店舗を吟味しながら探索することであり、〈楽歩地区〉においては、路面店舗の外壁（ファサード）の透過性の確保、共同化した建物における道路側からの出入口の確保、街路が交差するコーナー部にぎわい創出などを目指していきます。

沿道に面する商業店舗の外壁については、出来る限り透過性の確保を促すことにより、扱う商品を歩行者空間から楽しめるような環境を拡充していきます。



コラム：〈楽歩地区〉を活かした今後の取組に向けて 自由が丘のまちが守ってきた芸術の未来への継承

芸術とは文学、音楽、造形美術、演劇、舞踊、映画などの総称であり、一定の材料・技術・身体などを駆使して、観賞的価値を創出する人間の活動およびその所産であると定義されています（広辞苑）。自由が丘駅の前身である九品仏前駅が開設された 1927 年に自由教育の提唱者である手塚岸衛が自由ヶ丘学園を創設したことを契機に、手塚の知人である前衛舞踏家の石井獏が活動を始めた「自由が丘」というまちに様々な芸術家が集まるようになりました。

小説家の石川達三、石坂洋次郎、三島由紀夫、随筆家の渋沢秀雄、美術家の岡本太郎、画家の東郷青児、日本画家の福田豊四郎、作曲家の山田耕作、伊福部昭、彫刻家の澤田政廣、写真家の金丸重嶺など多様な芸術家を受け入れた自由が丘は、「自由」が統制される戦時を経ながらも、芸術の遺伝子を守り続けています。

【左】 1951 年における
文化人会の懇親会
【右】 1961 年における
澤田政廣作「蒼穹」
の除幕式



音楽という分野では、1985 年に始まった駅前ステージでのジャズフェスティバルが、現在はジャズ・ステーションとして展開し、まちの風物詩となっています。一方で、近年まちの成熟に伴い希薄化しつつある芸術の発信性を活性化する取組として、自由が丘の芸術家たちと関連深い東京藝術大学とのコラボレーションによる「アート&デザイン・プロジェクト」が展開されており、アートとデザインの視点によるまちの活性化への挑戦がはじまったところです。

まちを代表するイベントである
自由が丘ジャズ・ステーションの
前身であるジャズフェスティバル



アート&デザイン・プロジェクト
によるポラードペインティング
パフォーマンス〈PLACE+〉



アート&デザイン・プロジェクト
による〈出会いの道〉



歩行者を主役とする〈楽歩地区〉づくりにあたっては、長い時間を経て受け継がれる芸術という分野に着眼発想していくことが大切です。